

1 自己評価及び外部評価結果

(別紙4)

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	2490800238		
法人名	株式会社明日葉		
事業所名	グループホームあした葉 結の家みやがわ		
所在地	三重県伊勢市佐八町字前田712番地1		
自己評価作成日	令和5年11月29日	評価結果市町提出日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

当事業所は平成26年4月1日開設。理念は事業所の名前にもあるように利用者、家族、地域を『結の心』で結び、利用者にとって心安らぐ『第2の我が家』になることを目指している。当施設は山々に囲まれ自然豊かな環境の中、隣には保育園もあり、賑やかな声が聞こえ園児達の散歩コースにもなっている。普段は年に3回（運動会、夕涼み会、音楽会）の招待、敬老の日前後になると園児達が施設へ訪問してくれている。この数年は新型コロナウイルス感染防止対策の為、交流できなかったが徐々に再開している。健康は足からをテーマに日曜は利用者全員に足湯を行っている。また誕生会では手作りケーキと本人の一番食べたいもので祝っている。

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2490800238-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会		
所在地	津市桜橋2丁目131		
訪問調査日	令和5年12月26日		

玄関を中心に中庭を囲み平屋建ての事業所が伊勢市の郊外の豊かな自然の中に建っている。中庭に沿って可愛い声がよく聞こえる市立の保育園が隣接している。日々散歩する園児の姿も見える。天使のように可愛い子供たちに自然と満面の笑みがこぼれる。地域住民との交流もあり「結いの心」が溢れた事業所である。代表は理学療法士として活躍中、最後まで利用者と寄り添いたいと看護師資格も取得され、常に利用者中心の支援を心掛けている。職員も同じ方向を向き、プラスして職員間の関係の良さが一番の自慢と話し、イベントの企画や日々の支援内容や方法など積極的に職員の方から動いている。もうすぐ開所して10年の節目であり、コロナ過で出来なかった家族とのコミュニケーションや行政や地域との交流に力を入れ、更なる利用者へ添った支援を心掛ける予定である。

V. サービスの成果に関する項目（アウトカム項目） ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目：23, 24, 25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目：9, 10, 19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目：18, 38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目：2, 20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目：38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目：4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目：36, 37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目：11, 12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目：49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目：30, 31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目：28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「第2の我が家」結の心で利用者と家族、地域社会を結ぶ。この理念と共に「目配り」「気配り」「心配り」を忘れないように、会議毎に確認しあっている。	家の延長として、家族の参加は勿論、地域の交流も含め「人と人との心が通じ合うこと」という意味の【結いの心】を理念に掲げ実践している。職員も念頭に置きながら支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍以前は、地域の祭りに利用者と参加したり、隣の保育園の運動会に招かれ参加する等、少しずつ地域とのつながりが出来てきていた。現在は保育園との交流は再開しているが、コロナ禍の影響で地域の祭りの担い手不足による開催中止などがあり、これまでどおりの交流はまだ出来ていない。	隣接している保育園から、運動会・クリスマスコンサートへ招待されて、利用者へのプレゼントなど密な交流がある。地域へも事業所の駐車場を提供し、神社の情報などを得られたりと相互間の協力体制も整っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議にて、認知症の方達の生活について理解していただくよう努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	奇数月の第2火曜を予定として、2ヶ月ごと運営推進会議を行い、入居状況、事故報告などを隠さず報告しながら、適宜助言をいただけるようにしている。	今年度第3回の7月から運営推進会議を対面で開催している。行政、区長、民生委員、介護相談員、保育園長など多彩な参加者である。その中で避難訓練への助言を頂くなど貴重な時間となっている。	運営推進会議への家族の参加は重要である。家族アンケートや参加方法を考慮し、事業所の取り組みを丁寧に知らせ、一緒に向上しながら、互いの信頼性が強まることを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	制度やについて判断に迷う事例があった場合、すぐに行政に相談するようにしている。伊勢市介護保険課の職員も運営推進会議へ出席いただいている。	コロナ感染予防対策から発生時の対応など細やかな指導があった。運営推進会議では書面開催、対面時開催時の丁寧な助言もあり、行政の担当者とはどんな些細な事も相談できる良好な関係である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	スタッフ会議の中で、身体拘束に関する意見交換を行い、職員の共有認識を図っている。また身体拘束について職員に内部研修を行っている。	身体拘束や虐待防止については運営推進会議でも報告している。年間計画を作成し、身体拘束適正化委員会は3ヶ月毎に開催し回覧にて共有している。職員への研修はローテーションで担当職員を決め勉強し記録も出来ている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ミーティング、スタッフ会議等の中で、高齢者虐待について話をし、不適切なケアをしないように確認しあっている。また高齢者虐待防止について職員に内部研修を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	まだケースはなく、職員への説明も行われていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は重要事項説明書を用い、丁寧に説明を行っている。特に利用料金については別紙を用意し説明、納得いただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族には通院や面会等で来所された時など話しかけ、何でも言っていただけるような雰囲気作りに留意している。	面会は自由になり、11月に事業所内で開催した音楽会に家族を招いた。昼食を笑顔で召し上がる利用者の様子を見て、感激される家族がみえた。家族との信頼関係は良好であるが職員の名前を知りたいとの要望に考慮中である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ会議を月1回行い職員の意見を聞いている。会議は各自の都合に合わせ日を設定することでパート等でも2~3ヶ月に1回は必ず参加できるように工夫している。	職員会議は月1回あるが、日々の支援中に気楽に相談出来、一番の自慢は人間関係の良さであると職員からの声である。年1回の個人面談には仕事や私生活まで話せ、資格を取る時にはシフトの考慮をしてくれる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格の有無で給与に差があるが、職員には資格取得の機会を設け、意欲向上できるように努めている。半期に1度程度、代表者との個人面談を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修の情報を収集し、なるべく多くの職員が受講するように働きかけている。職員には初任者研修や実践者研修を受けてもらうなど、知識獲得に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域ケア会議や勉強会に参加を促し、同じ地域の同業者との交流機会を作っている。最近はZoom研修が増えており、職員同士の相互交流がしづらい状況ではあるが、研修・勉強会に参加を促している。		
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス利用について相談があった時は、必ず面談し、心身の状態を確認し、思いを聞き、本人に受け入れてもらえるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでの生活、苦労等をゆっくり聞くようにしている。その中でニーズを知り、次の段階につなげていけるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初回相談時、本人、家族の思いを聞きながら、現在の家庭状況を知り、優先的に必要なサービスにつなげるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は単に利用者として接するのではなく、人生の先輩として敬意をもって接することを指導している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	担当職員を決め、家族の要望など確認しつつ、一方では病院受診や必要物品の購入、搬入等をお願いしている。家族と職員が顔を合わせる機会を多く設け、そこで利用者の訴えなどを伝えてゆき、共に介護している関係を築くことが出来ている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔から行きつけの床屋、心の拠り所の道場、主治医の継続等、当事業所からの指定はせず、家族の協力も得ながら馴染みの関係が途切れないようにしている。	利用者の家族が近所で訪問理容をしており、利用者全員の馴染みとなっている。近くのお寺の住職は隣接の保育園の園長先生でもあり、馴染みの関係継続の支援も出来ている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の状況を見ながらホールの席順を入れ替えるなど、利用者同士仲良くなれるように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された後にも必要に応じて手助けが出来るよう家族に説明し、関係性を保った状態での退居を心掛けている。		
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居前には必ず本人様に施設を訪問していただき、納得していただいたうえで入居していただくようにしている。また家族から許可を得られた場合、出来る限りご自宅へ伺い、現在の生活を目で見て確認するようにしている。	自分が書き綴った日記を見ながら話をする利用者、携帯・帽子・財布の3点セットを常時持つてる利用者、塗り絵を自ら楽しむ利用者など、一人ひとりに合わせた利用者本位でじっくり寄り添う支援をすることを重視している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	面会時に本人、家族と話をすることで、生活歴を知り本人のことを理解できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムを知り、安定した精神状態で生活できるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人には日頃の関わりの中で、家族には病院受診の送迎や面会の時に、職員にはミーティングやスタッフ会議の中で、それぞれ意見や思い、要望を伺っている。	入居をする前、体験入居を1週間行い介護計画を立てる。入居後は全利用者の支援内容を毎日評価し、1か月後検討し、次への介護計画へ活かすという流れである。全職員で密に取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の利用記録に食事、排泄、入浴等や日々の暮らしの様子を記入し、全ての職員が情報を共有できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の状況に応じて、急な通院介助等柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	これまで、運営推進会議に市介護保険課、地域包括支援センター、区長、民生委員、駐在等の参加を得、地域で利用者が安心して暮らせるよう情報交換、協力関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	原則として家族による病院受診をお願いし、事業所からかかりつけを指定せず、これまで通りの医療機関を受けていただくことを重視している。これまでも協力医とは別の医療機関による往診もお願いしたことがある。	利用者の従前からのかかりつけ医を重要視しているが、現在は内科に関しては事業所の協力医に月1回訪問診療を受けている。24時間体制も取れており、協力的である。訪問看護の支援も月2回ある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	昨年6月より訪問看護ステーションと連携し医療連携体制を算定している。同一法人内での連携となっているが、その分、職員が看護師を知っていることもあり、密な相談や連携がとれている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはこちらからの直近情報を提供し、退院前にはどの程度の状況になれば再度受入可能かなど、医療相談員と電話連絡しながら調整を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化、看取りの方針は定めてあるが、まだケースは少ない。医療的ケアの少ない方については、終末期までお世話させていただくこともあり、その都度、本人・家族と話し合いを行い、支援している。	今年度2人、老衰に近い看取りを行った。コロナ禍で家族は裏口からの出入りであったが、職員と共に看取りが対応できた。また状態に応じて主治医や看護師の指導の下、話し合いも十分に出来た。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変時の応急手当、AEDの使い方など研修を受けたものが皆に伝えるように実技で行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、通報や避難など含めた総合訓練を実施している。それとは別に水消火器を用いた消火訓練を職員全員に行ってもらっている。今年度より地域の方へ訓練の見学、参加を依頼し施設の災害対策状況を知ってもらうよう努めている。	定期的な訓練は出来ているが消防署参加の訓練はない。今後、夜間時を含めた避難訓練や応急措置の方法など消防署の協力を得ながら行っていく予定である。また隣接している保育園との訓練も考慮したいと思っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「本人に不快な思い（悔しさ、恥ずかしさ、情けなさ）をさせない」ことを常に念頭において介護するように職員と話合っている。	職員に伝えていることは「常に自分がされて嫌な事はしない」である。日常の声掛けへの慣れには注意している。又、その時に何がしたいかを一番に聞き、一人ひとりを尊重する支援を心掛けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者本位に、どのように過ごしたいのかを、その思いを引き出せるような会話を心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	患者本人の生活リズムで過ごすように支援している。その中でもご自身でいたいと言われることは出来る限り行っていただくなど配慮した支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員から連絡し、都合を合わせて家族が季節の変わり目に衣類等交換に来てくれている。その中で外出着や着たい衣類などを選んでもらうようにしている。また美容院は希望に応じて地域の店舗から来てくれている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の好みを聞きながらメニューを考え、楽しく食事できるような雰囲気作りを大切にしている。また出来る方にはテーブル拭きや配膳、いただきますの号令をしてもらっている。	頂き物が多い為、月の約半分は業者の献立表から料理を選び、それ以外は手作りで作っている。おやつと行事食は基本手作りである。交代しながら2ユニット分を利用者と共に作っている。負担も少なく好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの食事量、水分量の把握を心掛けている。食事を取れないときには本人が食べれそうなものを準備し、少しでも食べられるように工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎日食前は口腔体操をしている。又、食後は一人ひとりに合わせて口腔ケアを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	男性利用者で立って排尿するとズボンを濡らしてしまうので、座ってできるように支援する等、個々に応じた方法で支援している。また出来るだけトイレでの排泄が出来るよう利用者個々にトイレ誘導の時間を設けるなどしている。	自立した利用者が多いが、個人のリズムに応じて見守り対応している。男性利用者が便座に座って排泄支援も成功し快適に過ごしている。夜間はポータブルトイレを使用する利用者もあるなど個々に応じた支援を心掛けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	胃腸の動きを促す為、起床時には茶碗一杯の水を飲んでいただくことを職員全員で行っている。また一日の水分量が少なくなならないよう促しながら水分摂取を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	現在入浴は週2回程度になっているが、嫌がるときには日時変更をしたり、清拭にするなど本人の気持ちに合わせて行っている。	入浴は週2回午前中に行い、浴室はユニットが交互で使用する為ユニット移動の楽しみもある。入浴後はボディミルクで整容し、日曜日は全員の足浴もある。一番大事にしている事は、利用者と職員との2人だけの会話である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は自室へ1人の時間を過ごし休まれる方も多いため、利用者全員で過ごす時間と自由な時間を調整しながら生活していただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬チェック表を用いて、利用者が確実に服薬できるように工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物を干したり、たたむこと、茶碗を拭くことや食材の下ごしらえ等、お願いできそうな仕事を頼み、終わった際には感謝の言葉を伝えるようにしている。また趣味をお持ちの方には積極的にそれを行っていただくようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	これまで、季節の花を見に行ったり、ドライブして公園などに行くようにしているが、現在も外出は少数程度で実施。また施設敷地や周辺道路を散歩するなどしている。	今はまだ外出は少ないが、今後は保育園との交流、事業所の庭への散歩や桜まつり、花街道への外出、宮川の桜見学、鳥羽への昼食など外出に力を入れる計画をしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	今のところ、お金を使う機会はないが、所持しないと落ち着かない利用者にはお金を持って来てもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居したての不安な時期には、家族に協力してもらい、決まった時間に電話してもらったり、不穏になった時には声を聞かせてもらうなどしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自然豊かな立地条件で窓から季節感を味わうことができる。また、利用者の様子を見ながら適度な明るさ、温度になるようにしている。	フロアは2ユニット合同でイベントが軽く出来る位の広さがあり、壁面も広く、沢山の手作り作品が飾ってある。事業所の自慢のフロアーである。廊下の端のソファは外をぼんやり見れる黄昏コーナーとして好評である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファを居眠りの場にしたり、会話したい方同士の席を設けたりするなど配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なるべく使い慣れた寝具や家具等持ってきてと働きかけている。部屋には家族の写真を飾る等、本人が落ち着くよう工夫している。	自分の居室に愛着を持っている利用者が多い。可愛いもので溢れている居室、自分の初給料で買った人形、お喋りしようと居室へ誘導する利用者、大事な帽子や携帯の充電器など置かれる等、一人ひとりを尊重した居室である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室に自分で名前を書いた紙を貼り、目印をつけることで自分の部屋であることがわかるように工夫している。		